

病害虫発生予察情報予報第 7 号

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
水稲 (普通期)	トビイロウンカ	多	多	159~161	
	<p>1. トビイロウンカ 依然として、各地域において多発生圃場が認められる。至急、各圃場での発生状況を確認し、多数の成虫・幼虫が認められた場合には直ちに防除を実施する。(平成 29 年 9 月 14 日付け警報第 1 号、平成 29 年 9 月 28 日付け対策資料第 10 号参照)</p> <p>2. 紋枯病 一部ほ場で上位葉鞘への進展がみられる。各圃場での発生状況を確認し、病斑の進展が認められた場合には直ちに防除を行う。</p> <p>3. コブノメイガ もち品種や葉色の濃い圃場では、本虫による被害が多くなる場合があるので、発生状況を確認し、防除を行う。</p>				
大豆	ハスモンヨトウ	並	やや少	204~206 210~212	 ハスモンヨトウ
	カメムシ類	やや多	多	205~206 212~213	
<p>1. ハスモンヨトウ 一部の圃場で白変葉(若齢幼虫の集団による被害)の発生が認められる。防除後においても新たな白変葉の発生を確認したら、追加防除を実施する。</p> <p>2. カメムシ類 莢の伸長初期~子実肥大中期に防除を実施する。なお、圃場でカメムシ類が散見される場合には、7~10 日間隔で 2~3 回防除を行う。</p> <p>3. 紫斑病 若莢期~子実肥大中期に防除を実施する。</p>					
普通作全般	<p>1. 薬剤散布の際の留意点 薬剤散布は、周辺環境に十分配慮し行う。特に、ミツバチの被害を回避するため、養蜂農家に農薬の散布時期や散布時間等を予め伝達するなどの対応を取る。</p>				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
イチゴ(本圃)	ハダニ類	並	やや多	214~215	 ハダニ類
	うどんこ病	やや少	並	204~206	
	アブラムシ類	やや多	並	219~220	
	1. ハダニ類 一部の圃場で発生が認められる。発生初期に防除を徹底する。また、天敵を利用する圃場では有効薬剤によりハダニの密度を0頭レベルに抑えた後に、天敵(カブリダニ類)を放飼する。 2. うどんこ病 果実での発生を防ぐため、頂果房開花前までの防除を徹底する。 3. 炭疽病 汚斑型病斑が多発生した圃場がみられる。発病株は伝染源となるため早期に除去する。 4. 次年産親株 次年度作での炭疽病、萎黄病等の発生を抑えるため、健全親株を確保する。特に、育苗期に発生が認められた圃場では優良原種苗等へ更新する。また、これらの親株についても秋季から炭疽病、うどんこ病及びハダニ類の防除を徹底する。				
キュウリ	べと病	やや多	並	184~185	 ミナミキイロアザミウマ
	うどんこ類	やや少	並	182~183	
	褐斑病	やや少	やや少	187~188	
	アザミウマ類	やや多	やや多	196	
	コナジラミ類	並	並	195~196	
1. ミナミキイロアザミウマ、タバココナジラミ、黄化えそ病、退緑黄化病 ウイルス病の罹病株を認めた場合は、早急に処分するとともに、媒介虫の薬剤防除を徹底する。また、天敵を利用する圃場では、有効薬剤によりハダニの密度を0頭レベルに抑えた後に、天敵(カブリダニ類)を放飼する。 2. 病害全般 高温・多湿の夜や早朝は、循環扇や加温機ダクトの送風を利用して、結露時間を短くし病害の蔓延・多発を防止する。					
アスパラガス	茎枯病	やや多	やや多	318	 褐斑病
	褐斑病	やや多	並	319~320	
	斑点病	やや少	少	319	
	アザミウマ類	多	多	322	
	ハダニ類	やや多	やや多	322~323	
1. アザミウマ類・ハダニ類 本作で発生した虫が次作の発生源となるので、収穫終了後も薬剤防除を定期的に行う。 2. 褐斑病、斑点病、茎枯病 発病茎葉が次作の伝染源となるため、収穫終了後も薬剤防除を定期的に行う。 3. コナジラミ類 健全な茎葉を維持するため、収穫終了後も薬剤防除を定期的に行う。					
タマネギ	1. べと病 苗への感染を防ぐため、育苗期から定期的に薬剤防除を行う。				
野菜共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ) (オオタバコガ)	やや多	やや多	168, 170 仔ゴ: 217~219 ｽ: 252~253 ｱｽﾊﾟﾗｶﾞｽ: 321, 324 ｷ: 398	

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
果樹全般	果樹カメムシ類	多	多	かキツ：248～251 ナシ：304～305 ブドウ：351	 チャバネアオカメムシ
	<p>1. 果樹カメムシ類 小城市に設置した予察灯において、誘殺数が多い状況が継続している。特に本年はツヤアオカメムシの誘殺数が平年よりも多くなっており、カンキツでは被害が収穫期まで続くことが考えられる。発生量や飛来時期は地域によって異なるため、各園地の飛来状況の把握に努め、飛来が認められた場合には、直ちに防除を実施する。(平成29年9月25日付け病虫害対策資料第9号参照)</p> <p>2. 夜蛾類 夜温が高いと夜蛾類の活動が活発になるため、果実の被害に注意する。園地周辺のカミエビ、アケビ、ムベ等は夜蛾類幼虫の食草となるので除去する。また、忌避灯を設置している園では、点灯時間は日の出・日没の時刻に合わせて調整する。</p>				
カンキツ	ミカンハダニ	並	多	242～244	
	チャノキイロアザミウマ	並	並	236～242	
<p>1. 果実腐敗対策 日焼け果や裂果は果実腐敗の原因となるので収穫時に取り除き処分する。また、降雨時・結露時の収穫は避けるとともに、果実に傷をつけないよう丁寧に取り扱う。腐敗防止対策の薬剤は収穫7～10日前に、霧状になるノズルを使ってムラがないように散布する。</p> <p>2. かいよう病 台風の襲来等強風雨が予想される場合は、襲来7日前～前日までに必ず薬剤散布を行う。</p> <p>3. ミカンサビダニ 園内及び周辺の園で新たな被害を認めた場合は、早急に薬剤を散布する。特に、前年に被害が多発した園や放任園等に隣接する園では防除を徹底する。</p>					
ナシ	<p>1. 黒星病 翌年の伝染源を減らすため、収穫終了後の防除を徹底する。落葉した葉は本病の伝染源となるので、埋却もしくは園外に持ち出し処分する。</p>				
ブドウ	<p>1. べと病・褐斑病 本病による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のため、収穫終了後の防除を徹底する。落葉した葉は本病の伝染源となるので、埋却もしくは園外に持ち出し処分する。</p>				
フルーイ	<p>1. かいよう病 感染を防止するため、収穫終了直後から、銅水和剤を定期的に散布する。</p>				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
キク	白さび病	並	並	390～391	 アザミウマ類
	アザミウマ類	やや多	並	394～395	
	アブラムシ類	並	並	397～398	
	ハダニ類	並	並	396	
	ハモグリバエ類	並	やや多	399	
	チョウ目害虫	多	多	398～399	
1. アザミウマ類 本虫は、施設外から侵入し、施設内で増殖するため、施設内及びその周辺の雑草を除草するとともに、発生状況を随時確認し、低密度時からの防除を徹底する。					
2. チョウ目害虫 一部圃場で食害が認められる。幼虫の齢が進むと薬剤の効果が落ちるので、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。特に、オオタバコガは薬剤がかかりにくい新芽や花蕾に食入するので、よく観察して初期防除を徹底する。					

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
 なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
- 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
 6 ページ目以降：巡回調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

10月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 10 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 3 ヶ月予報（平成 29 年 9 月 25 日）を基に、「気温：平年よりやや高い」、「降水量：平年よりやや少ない」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	3 ヶ月予報における 10 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	20	40 (18.6℃)	40	やや高
降水量	40	40 (75.5 mm)	20	やや少

Ⅲ. 10月の予報

水稲（普通期水稲）

巡回調査（41 圃場）
調査日：9月21～25日



巡回調査圃場の様子（普通期水稲）

1. トビイロウンカ

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率40.8%（平年13.4%、前年1.8%）
平年比：多く+） 前年比：多く+
 - ②10月の気象予報
気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）
 - (2) 防除上注意すべき事項
 - (1) 警報第1号及び特記事項を参照。

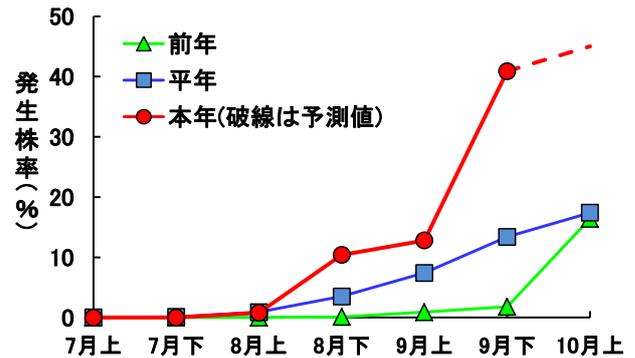


図1 普通期水稲でのトビイロウンカの発生推移

大豆

巡回調査（22 圃場）
調査日：9月19日



巡回調査圃場の様子（大豆）

1. ハスモンヨトウ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年よりやや少ない）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率2.0%（平年5.5%、前年7.8%）
平年比：やや少（-～+） 前年比：少（-）
白変葉発生株率0.7%（平年1.9%、前年0.1%）
平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）
 - ②フェロモントラップ（図2参照）【県内9地点】
平年比：並（±）
 - (2) 10月の気象予報
気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

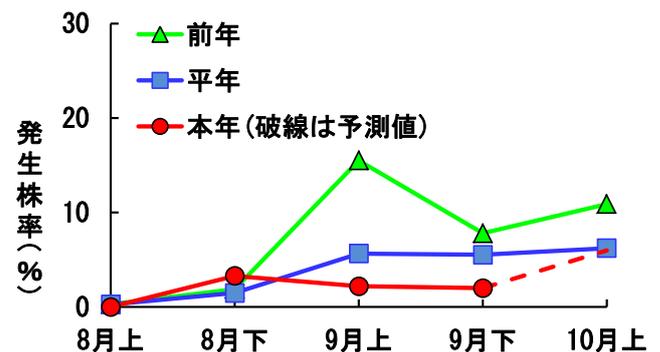


図1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

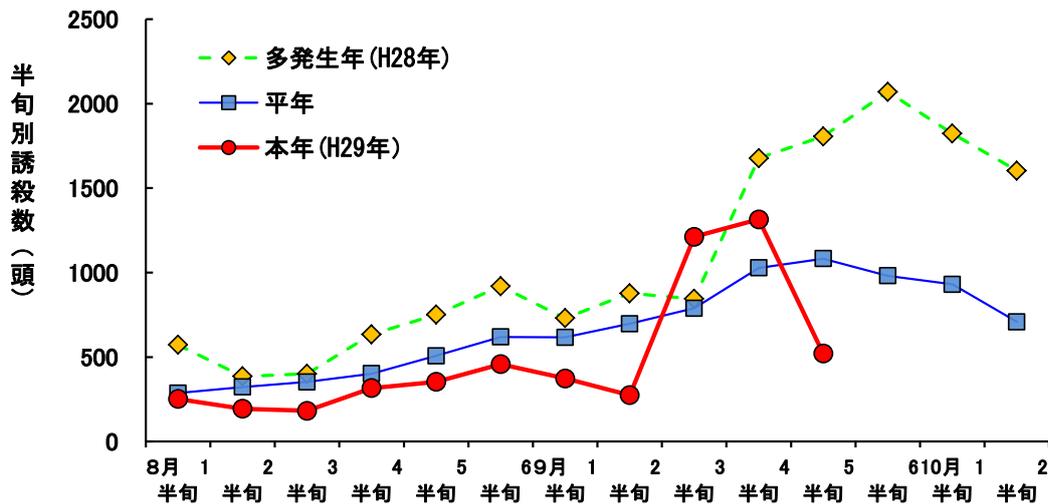


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数 (10月2半旬まで)
(農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。)

2. カメムシ類 (アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、ホソヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ等)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査(図1参照)

発生株率0.2% (平年0.2%、前年0.7%)

平年比：並(±) 前年比：少(-)

(2) 10月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件(±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照

(2) 防除に当たっては、薬剤が莢によくかかるように散布する。

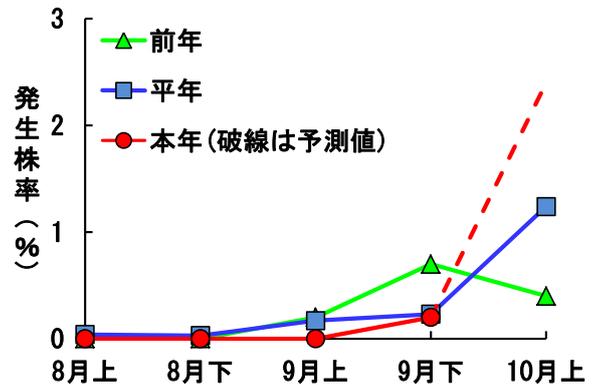


図1 大豆でのカメムシ類の発生推移



巡回調査圃場の様子

イチゴ (本圃)

(巡回調査11圃場、防除員4圃場)
調査日：9月21日~25日

1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査(図1参照)

発生株率：2.9% (平年6.5%、前年3.7%)

平年比：やや少(-~±) 前年比：並(±)

(2) 10月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件(±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。

(2) その他については特記事項を参照。

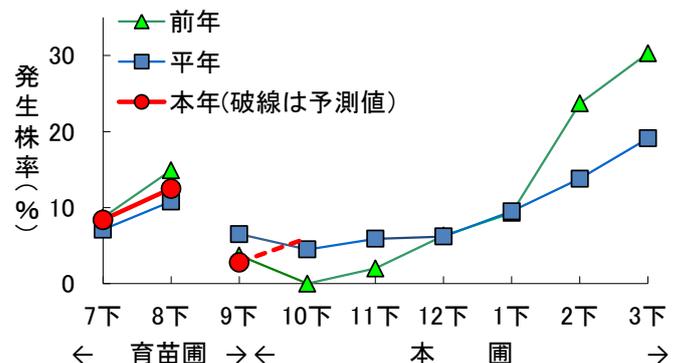
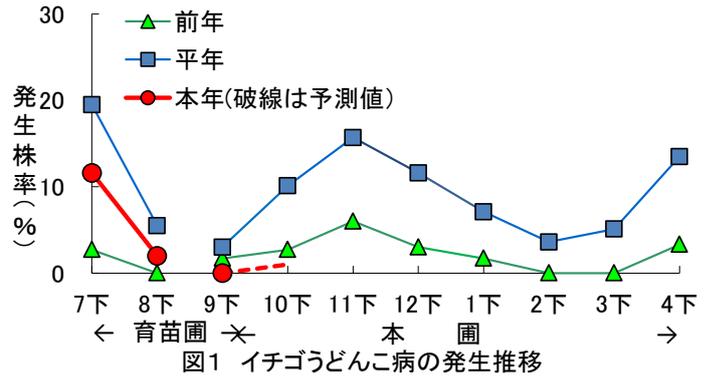


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

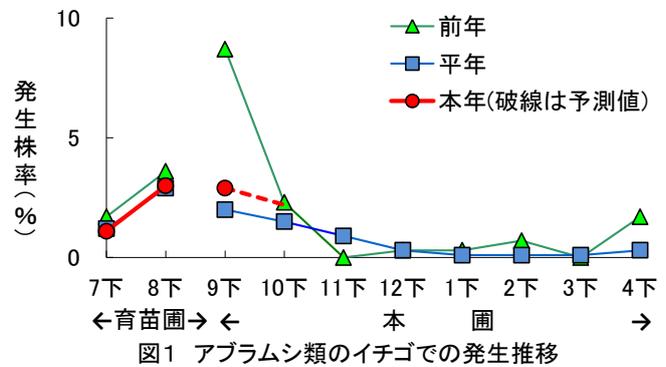
2. うどんこ病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の実況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率：0%（平年3.0%、前年1.7%）
平年比：やや少（一～±） 前年比：並（±）
 - (2) 10月の気象予報
降水量が少なく、やや少発生の条件（一～±）
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。
 - (2) その他については特記事項を参照。



3. アブラムシ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の実況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率：2.9%（平年2.0%、前年8.7%）
平年比：並（±） 前年比：少（一）
 - (2) 10月の気象予報
気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）
 - 3) 防除上注意すべき事
 - (1) 発生初期からの防除を徹底する。
 - (2) 圃場周辺の雑草は本虫の発生源となるため、除草を徹底する。



キュウリ（抑制）

（巡回調査8圃場）
調査日：9月21日～25日



巡回調査圃場の様子

1. ベと病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の実況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率：16.7%（平年6.4%、前年2.9%）
平年比：多（+） 前年比：多（+）
 - (2) 10月の気象予報
降水量がやや少なく、やや少発生の条件（一～±）
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。

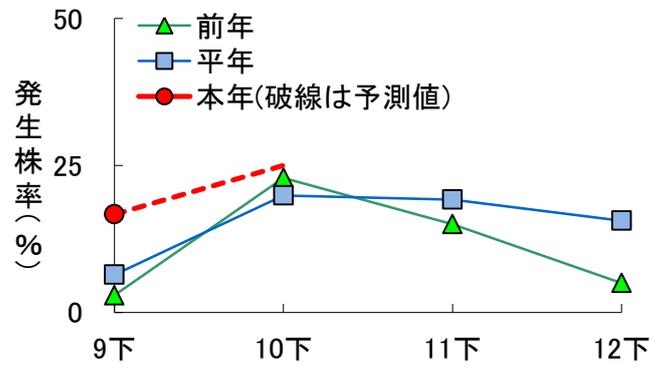


図1 キュウリべと病の発生推移

2. アザミウマ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率：1.5%（平年2.2%、前年0.7%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - (2) 10月の気象予報
気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

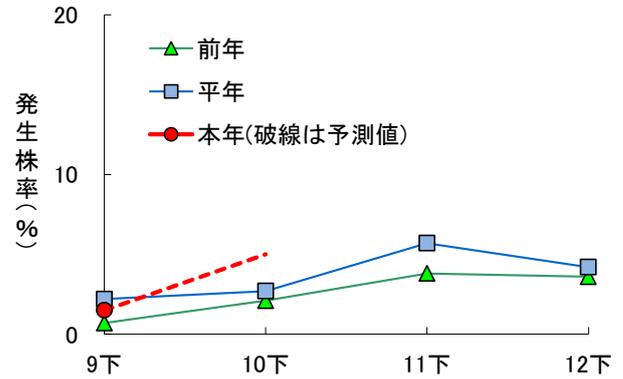


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移



巡回調査圃場の様子

アスパラガス

巡回調査（8圃場）
調査日：9月19日～25日

1. 茎枯病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率：4.4%（平年1.2%、前年0.5%）
平年比：多（+） 前年比：多（+）
 - (2) 10月の気象予報
降水量がやや少なく、やや少発生の条件（-～±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

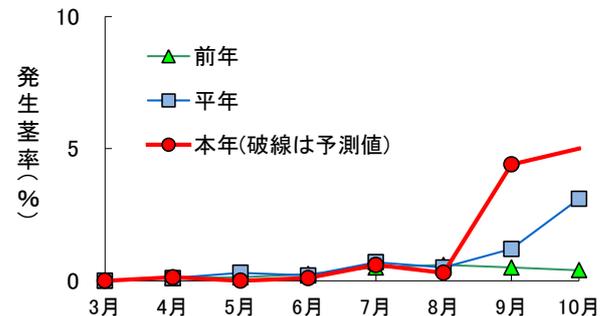


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

2. 褐斑病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率：52.5%（平年29.9%、前年39.4%）
平年比：多（+）
前年比：やや多（±～+）
 - (2) 10月の気象予報
降水量がやや少なく、やや少発生の条件（-～±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

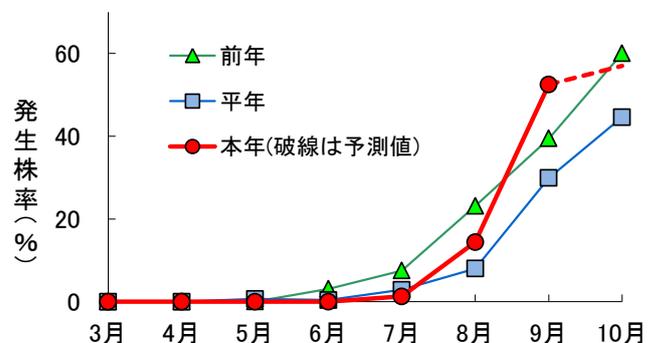


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

3. アザミウマ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率：44.4%（平年23.3%、前年28.1%）
平年比：多〈+〉 前年比：やや多〈±〜+〉
 - ②10月の気象予報
気温がやや高く、やや多発生の条件〈±〜+〉
 - (2) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

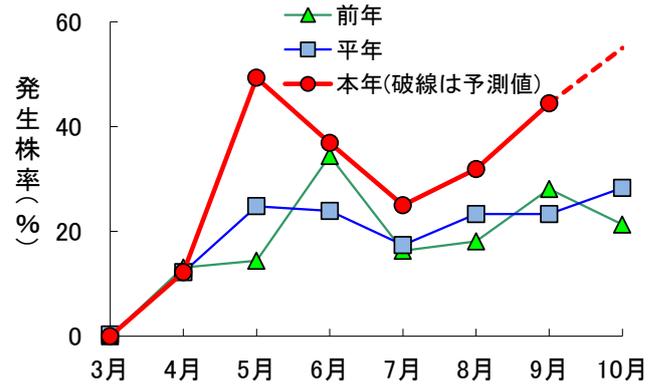


図1 アザミウマ類のアスパラガスでの発生推移

4. ハダニ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率：5.6%（平年6.7%、前年9.4%）
平年比：並〈±〉 前年比：やや少〈-〜±〉
 - ②10月の気象予報
気温がやや高く、やや多発生の条件〈±〜+〉
 - (2) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

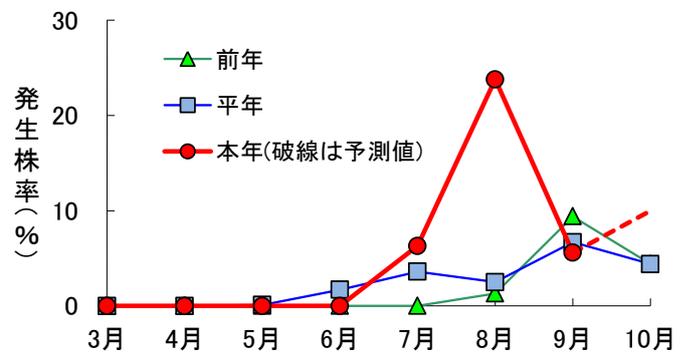


図1 ハダニ類のアスパラガスでの発生推移

野菜共通

1. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ）

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
イチゴにおける被害株率：1.1%（平年0.9%、前年0.3%）
平年比：並〈±〉 前年比：やや多〈±〜+〉
アスパラガスにおける被害株率：0%（平年0.8%、前年0%）
平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉
 - ②フェロモントラップによるハスモンヨトウ及びオオタバコガの9月の誘殺数は、平年並〜やや多く推移している（図3〜4）。〈±〜+〉
 - (2) 10月の気象予報
気温がやや高く、やや多発生の条件〈±〜+〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 圃場毎の発生状況を確認し、本虫の若齢幼虫期に防除する。

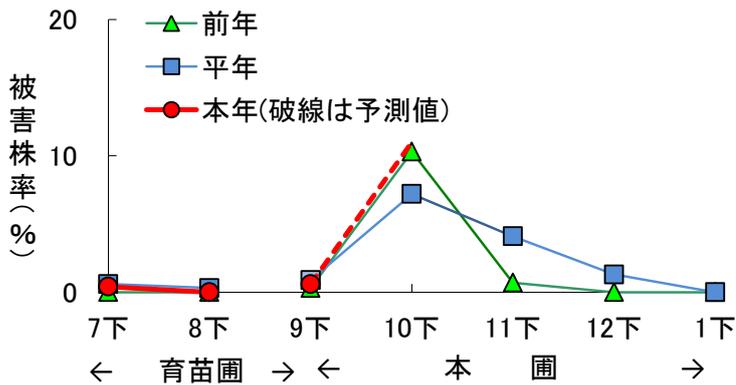


図1 チョウ目害虫によるイチゴの被害株率の推移

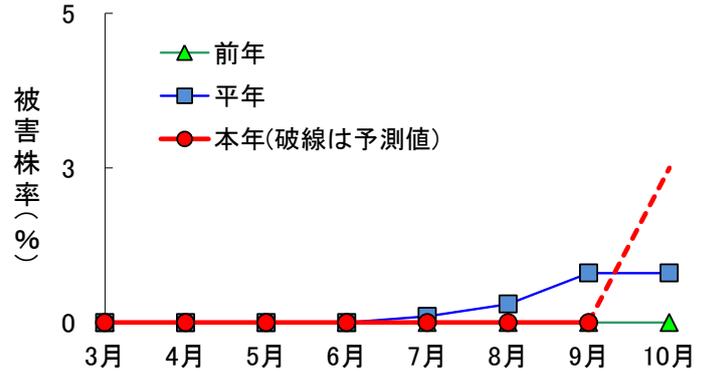


図2 チョウ目害虫のアスパラガスでの被害株率

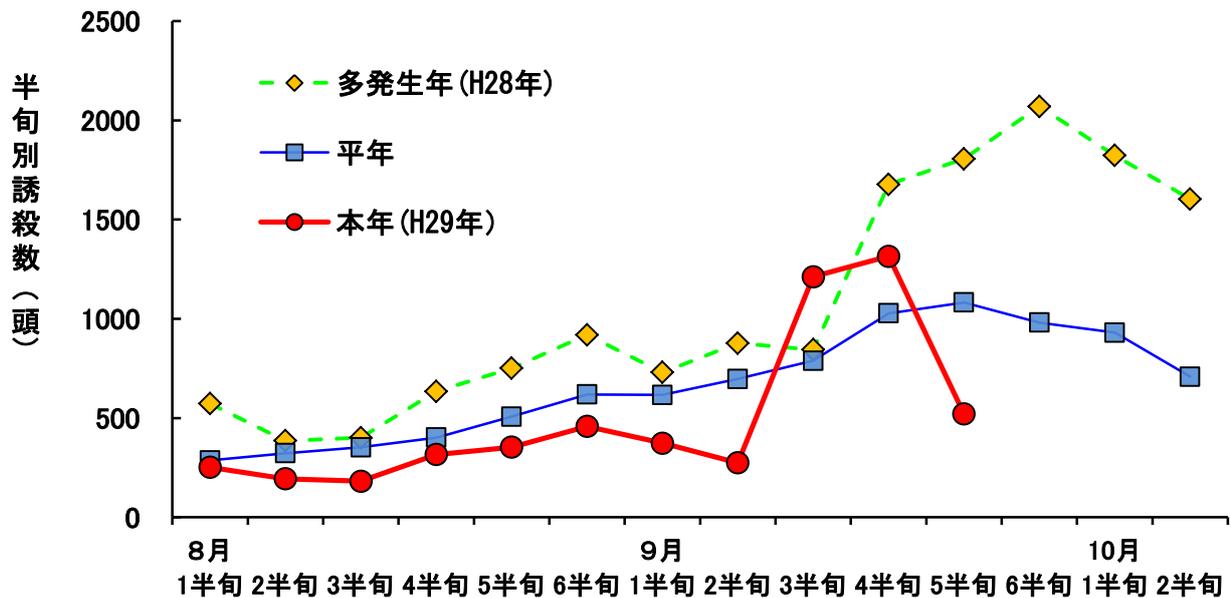


図3 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
(農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。ただし、年によっては、8月2半旬頃から調査開始の地点がある。)

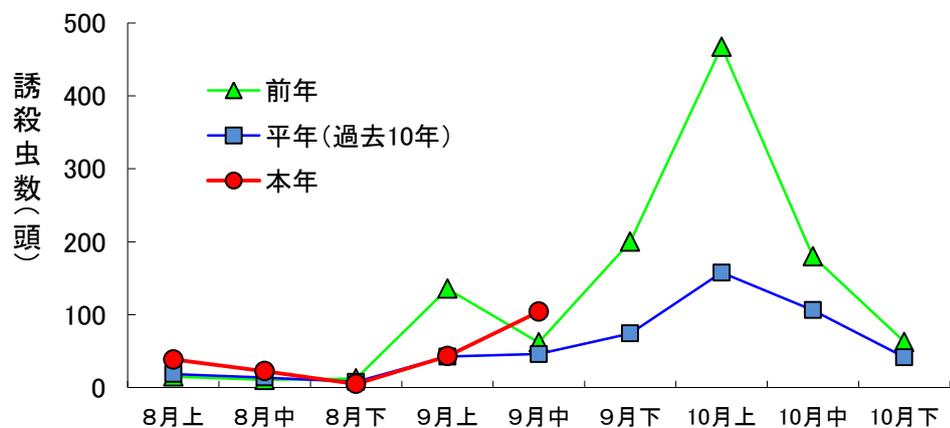


図4 フェロモントラップによるオオタバコガの半旬別誘殺数
(病害虫防除員による川副町2地点での平均誘殺数)

果樹全般

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①予察灯（図1参照）

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

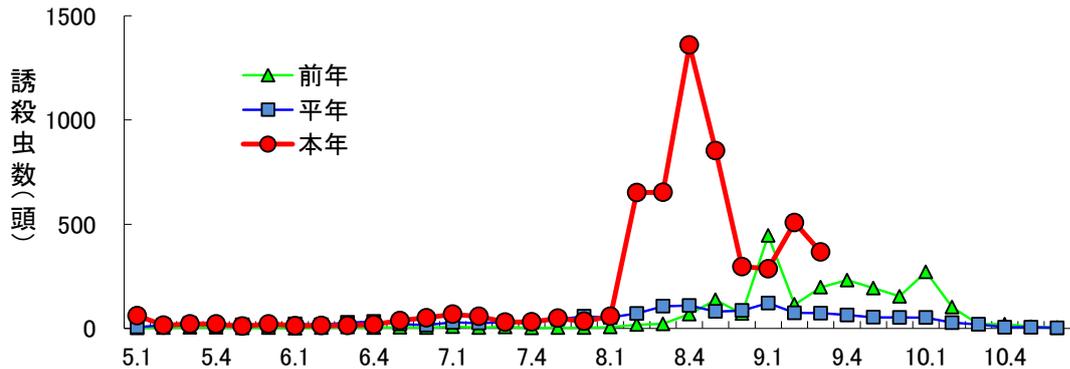


図1 予察灯（佐賀市、小城市、太良町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

②ヒノキ毬果における寄生数（図2、表1参照）

成幼虫数平均：17.2頭（平年7.5頭、前年10.8頭）

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

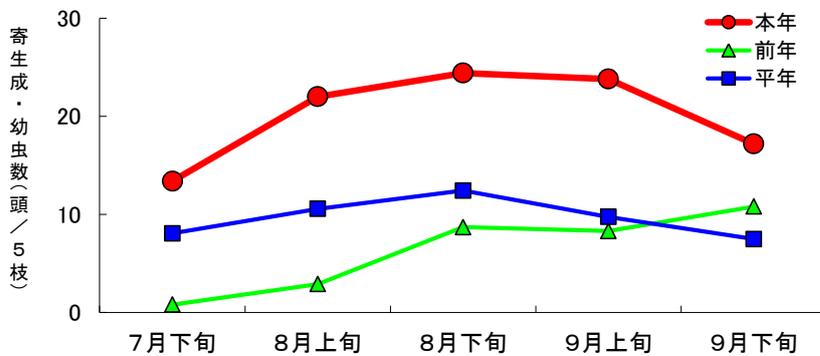


図2 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生数の推移

③ヒノキ毬果における口針鞘数（図3、表1参照）

口針鞘数平均：18.7本/果（平年20.5本、前年22.1本） 平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

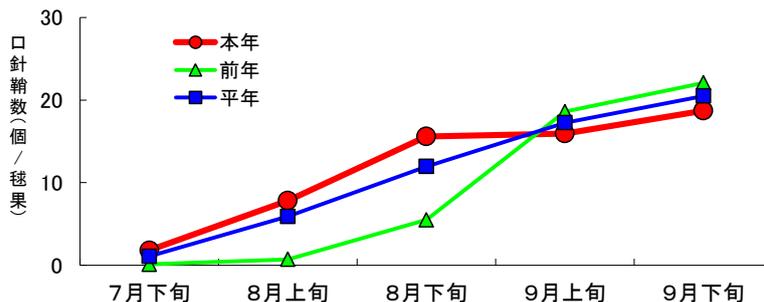


図3 果樹カメムシ類によるヒノキ毬果の口針鞘数の推移

表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生虫数及び口針鞘数

No.	調査地	ヒノキ毬果における寄生状況 1)				口針鞘数調査 2) (寄生状況調査時にサンプル採取)		ヒノキ毬果 3) 着果程度
		9月上旬 (9/4~7) 合計	9月下旬(9/19~22)			9月 月上旬	9月 月下旬	
			成虫	幼虫	合計			
1	上峰町	5	1	1	2	19.2	19.4	やや少
2	神埼市	6	3	0	3	21.3	23.3	やや多
3	小城市	8	4	0	4	15.7	19.6	やや多
4	多久市	11	8	1	9	5.8	12.0	やや多
5	唐津市 1	2	3	4	7	11.1	15.1	多
6	唐津市 2	37	26	0	26	12.1	16.8	多
7	伊万里市 1	40	27	0	27	13.1	18.9	中
8	伊万里市 2	64	11	1	12	29.3	26.0	やや多
9	伊万里市 3	30	2	1	3	11.5	17.4	中
10	白石町	36	54	3	57	13.3	14.2	多
11	鹿島市 1	15	4	0	4	14.5	20.3	やや多
12	鹿島市 2	23	32	22	54	19.4	21.2	やや多
13	鹿島市 3	5	8	0	8	31.8	22.3	中
14	太良町 1	40	23	8	31	6.5	16.5	中
15	太良町 2	35	11	0	11	15.1	18.5	中
	平均	23.8	14.5	2.7	17.2	16.0	18.7	
	平年	9.7	-	-	7.5	17.3	20.5	
	前年(H28年)	8.3	5.5	5.3	10.8	18.6	22.1	

1)たき落としによる調査

2)口針鞘数が1果当たり25本を超えるとヒノキ毬果が餌として不適となりカメムシがヒノキ毬果より離脱する傾向

3)ヒノキ毬果着果程度:福岡総農試の達観調査法(一部改変)に基づいて調査

- ・極少:ほとんど結実が見あたらない
- ・少:梢頭部にわずかに結実
- ・やや少:梢頭部から中央部周辺にかけて結実した樹と梢頭部にわずかに結実した樹が混在
- ・中:梢頭部から中央部付近にかけて結実
- ・やや多:梢頭部から最下部にかけて全面的に結実した樹と全面的に結実しない樹が混在
- ・多:梢頭部から最下部にかけて全面的に結実
- ・極多:梢頭部から最下部にかけて全面的にブドウ状に結実

(2) 10月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件〈±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)合成ピレスロイド系薬剤やネオニコチノイド系薬剤の残効期間は10~15日程度である。なお、これらの薬剤を散布するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖(リサージェンス)を生じる場合があるので、両害虫の発生に注意する。
- (2)ネオニコチノイド系薬剤は、50mm程度の降雨で効果が低下するため、散布後に同雨量以上の降水があった場合は、再散布を行う。
- (3)県内各調査地点における誘殺状況の推移については、佐賀県農業技術防除センターHPの「病害虫データ情報」を参照する。
- (4)その他については、特記事項を参照する。

カンキツ

巡回調査(8圃場)
調査日:9月19日~22日

1. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量: 平年並(前年より多い)



巡回調査圃場の様子

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生葉率: 0% (平年 3.3%、前年 1.0%)
 平年比: 少 (<-) 前年比: 並 (<±)

(2) 10月の気象予報

気温がやや高く、降水量がやや少ないため、
 多発生の条件 (<+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時 (寄生葉率 30%未滿または1葉当たりの雌成虫の数が0.5~1頭) からの防除を徹底する。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

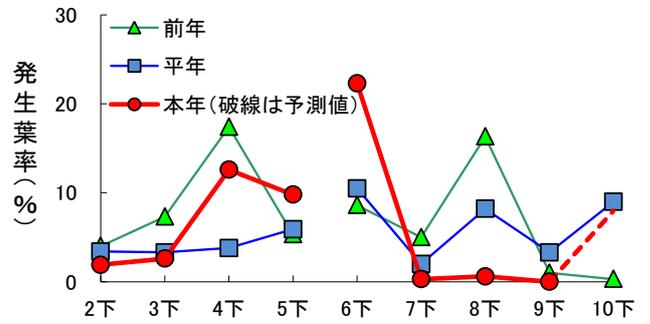


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移
 (注: 5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査)



巡回調査圃場の様子

キク

巡回調査 (8圃場)
 調査日: 9月19~22日

1. アザミウマ類 (クロゲハナアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生株率 7.3% (平年 4.8%、前年 12.9%)
 平年比: 並 (<±) 前年比: やや少 (<-~±)

(2) 10月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件 (<±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) クロゲハナアザミウマは葉裏に寄生していることが多いため、葉裏にも薬液がかかるよう丁寧に散布する。
- (2) ミカンキイロアザミウマについては、キクえそ病・茎えそ病のウイルスを媒介するため、発生初期からの防除を徹底するとともに、発病株は早急に抜き取る。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

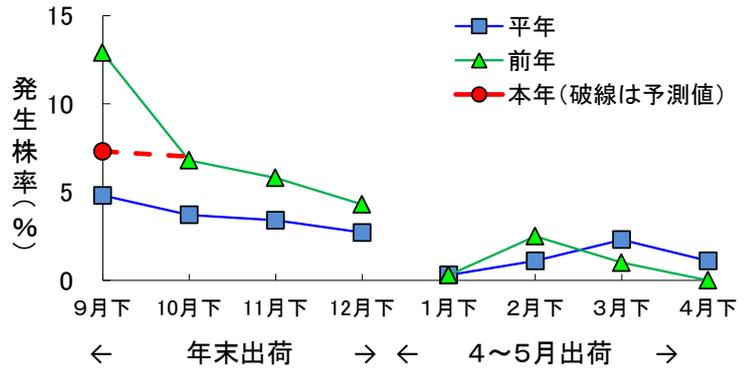


図1 アザミウマ類のキクでの発生推移

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査

発生株率 0% (平年 3.3%、前年 0.3%)
 平年比: やや少 (<-~±) 前年比: 並 (<±)

(2) 10月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件 (<±~+)

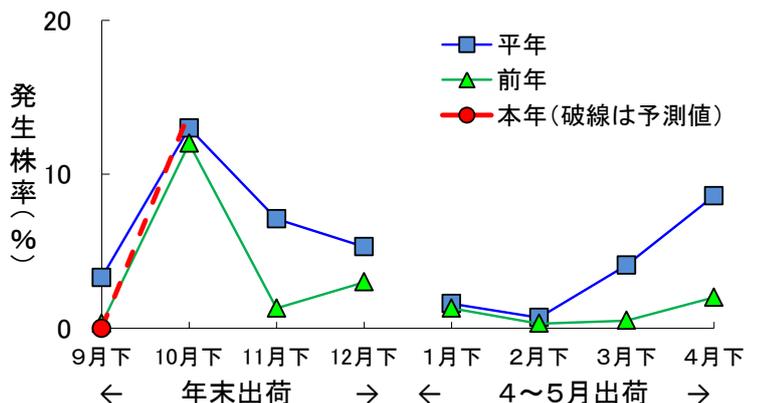


図1 ハダニ類のキクでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、オオタバコガ)

1) 予報の内容

発生量：平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

被害株率 2.3% (平年 0.7%、前年 0%)

平年比：多 (+) 前年比：多 (+)

②フェロモントラップによる誘殺数

野菜共通の項目参照 (P10)。 (±~+)

(2) 10月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設開口部に防虫ネット等を設置し、施設内への侵入を防止する。
- (2) その他は特記事項を参照。

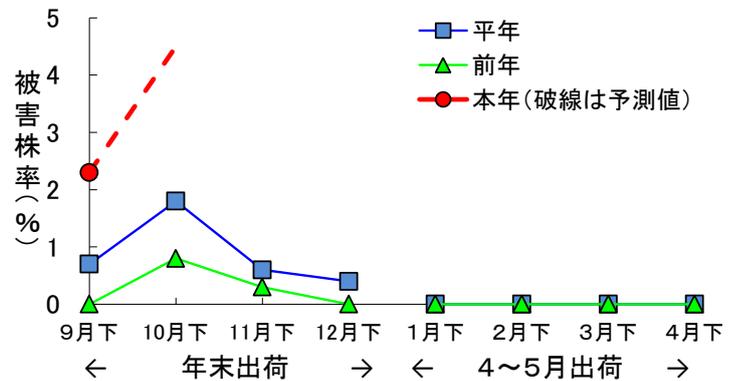


図1 チョウ目害虫のキュウでの被害株率の推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088
TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085
Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp